Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

令和6年度企画展示 開幕！

多摩の"なんで!?"な出土品

調査員の研究ノート　調査研究員　両角まり……2

遺跡だより　文京区　小日向一・二丁目南遺跡……4

あの遺跡は現在!?　文京区　春日二丁目西遺跡……5

『旧石器から縄文へ』……6

令和5年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー報告

令和6年度企画展示紹介

「多摩の"なんで!?"な出土品」……8

東京都埋蔵文化財センター報　136

調査員の研究ノート

こんな研究しています

#4　調査研究員　両角まり

当センターの調査研究員が
行っている さまざまな研究を
やさしく紹介する新コーナーです。

新しい時代の研究

皆さんは、考古学といえば「何といっても縄文土器や古墳！」と思っていませんか。確かに、縄文土器や古墳は考古学のスターといってもいいでしょう。しかし、考古学とは人間の遺（のこ）したものを通じて物質文化や社会を読み解こうとするもの。私たち調査研究員は、日々、古きも新しきも「土に埋まっているもの」全般を相手に仕事をしています。そんな中で、私が研究してきたのは、考古学の扱う時代の中でもかなり新しい部類に属す、近世の江戸出土土器です。

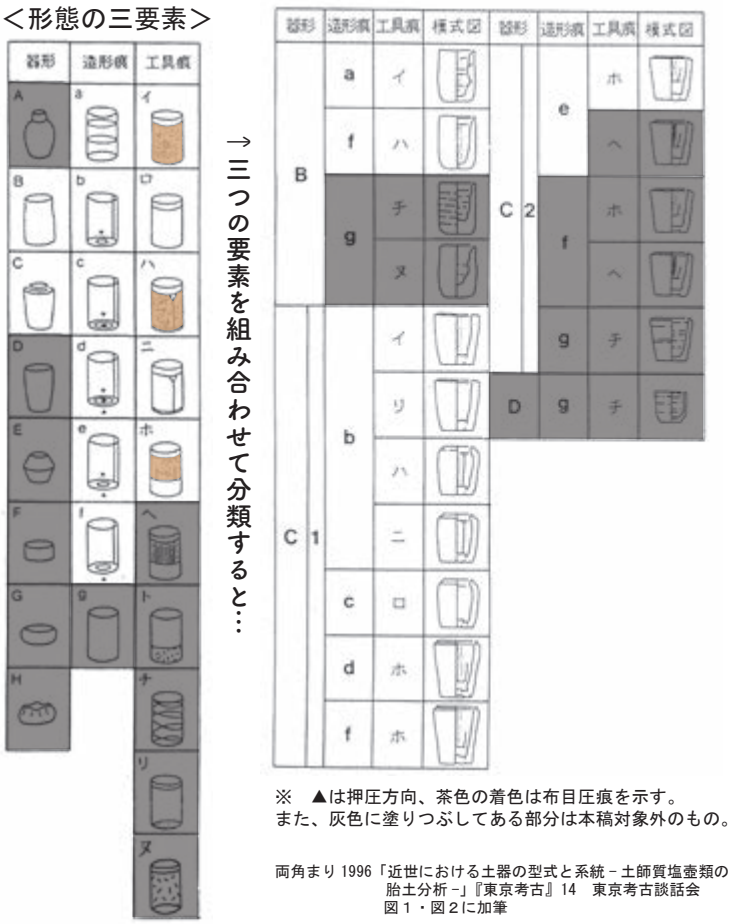
塩壺の研究

近世の江戸では100種類以上の土器が見つかっていますが、その中に「塩壺（しおつぼ）」といわれる一群があります（図１）。蓋（ふた）を伴っていて、湿り気のある海水塩を詰めて焼き返し、できた焼塩は土器ごと食卓に供されます。塩の主要産地だった阪南地域で生産され、ほとんどが江戸で消費された江戸向けの高級品です。径7cm、高さ10cm前後の壺形で、形や造り方がバラエティーに富んでおり、正面に刻印があるのが際立った特徴です。文献の中に刻印に関する記載がいくつかあり、実年代を推定できる遺物として、注目されます。この塩壺を例にとって、近世の江戸出土土器研究の一端をご紹介しましょう。

まずは、バラエティーに富んだ形態を整理するために、①器形（きけい）：全体のフォルム（B、C１、C２の３種）②造形痕：粘土の使い方（a～fの６種）③工具痕：器表に残された離材の痕跡（イ～ホの５種）の三つの要素に分解し、例えば「B－a－イ」といったように、その組み合わせで分類します（図２）。これに、もう一つの特徴である刻印を加味して、古い順に並べたものが図３です。各形態の消長は灰色の太線で表してありますが、様々な形態が次々に現れては消えてゆく様がわかります。また、刻印に注目すると、主要な刻印は二系統（「みなと」が入る薄赤ライン、「いづみ」が入る薄青ライン）で、これらを模倣あるいは意識したらしいもの（「麻」を「磨」に、「生」を「玉」に置き換えたり、「堺」や「泉州」に近い「摂州」や「大阪」を取り入れるなど）がいくつも出現していることもわかり

図１　塩壺の外観（蓋なし）

（左）丸底輪積成形のB-a-イ　（右）口縁に段のあるC1-c-ロ
「天下一御壺塩師堺見なと伊織」銘　「御壺塩師堺湊伊織」銘



両角まり 1996「近世における土器の型式と系統－土師質塩壺類の胎土分析－」『東京考古』14　東京考古談話会
図１・図２に加筆

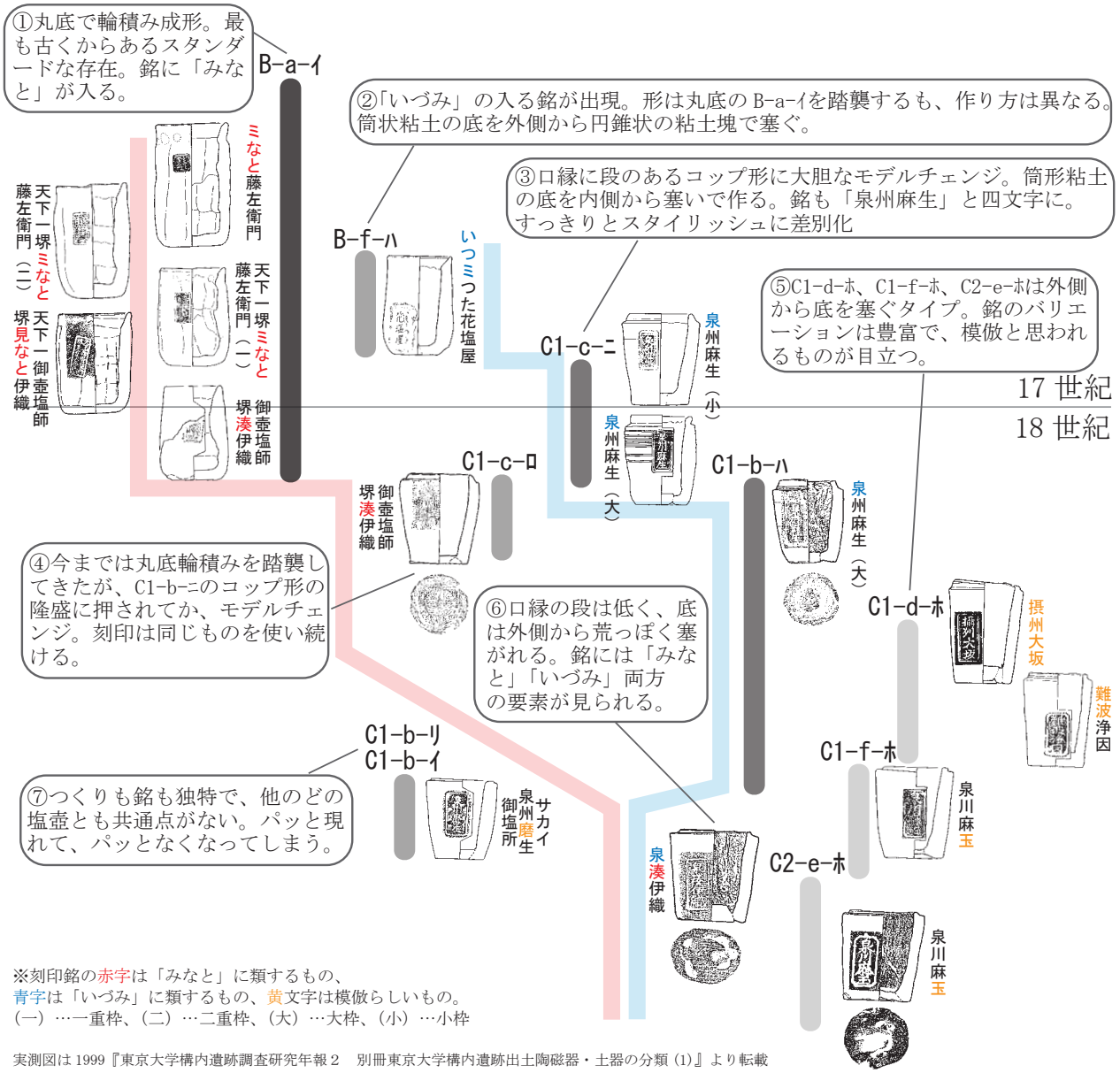
図２　形態分類概念図

ます。図中①～⑦のコメントは、こういった変化を、形態（壺屋＝壺の製造者）と刻印（塩屋＝塩の製造者）の両面から併せて検討し、全体の流れの中に位置付けて解釈したものです。順を追ってみてゆくと、「みなと」、「いづみ」の二大塩屋の攻防、これを追う中小塩屋の追い上げ、壺屋の盛衰など、厳しい競争があったことが伺われます。

塩壺の研究は、当初は、形態の変化を明らかにし、刻印と照らし合わせながら実年代を推定することを大きな目的としていました。しかし、最終的には、ただ単に物が変わっていく様子を明らかにするだけではなく、その背景にある社会・経済状況を読み解くものとなり、私の研究にとって大きな画期となりました。

より新しい時代へ

塩壺だけでなく、近世の江戸出土土器を広く研究する中で、これらの土器が明治前半までは連続性を持っていること、明治後半に東京（もう江戸ではない！）で出土する土器の様相が大きく変わることなどがわかってきました。政治史的には1868年1月3日の明治維新が大きな転換点ですが、物質文化は途切れることなく淡々と続き、モノ独自の転換点を示すのです。私が近世江戸出土土器の研究から得た大きな気付きです。最近は、この気付きを以て、より新しい時代の調査にも取り組んでいます。きっと、塩壺の研究と同じように、新しい気付きと成果が得られることでしょう。



※刻印銘の赤字は「みなと」に類するもの、
青字は「いづみ」に類するもの、黄文字は模倣らしいもの。
（一）…一重枠、（二）…二重枠、（大）…大枠、（小）…小枠

実測図は1999『東京大学構内遺跡調査研究年報２　別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』より転載

図３　塩壺の変遷

遺跡だより 139

文京区　小日向一・二丁目南遺跡

所在地　：　文京区小日向２丁目
調査期間：　2023 年 10 月～
調査面積：　978㎡

小日向一・二丁目南遺跡（文京区 No.118）は、文京区小日向一丁目・二丁目地内に所在する遺跡です。東京メトロ有楽町線江戸川橋駅の北方約 200 m、小日向台地と呼ばれる高台の縁辺部に立地し、台地の平坦面から傾斜面にかけてが遺跡の範囲となっています。

東京都埋蔵文化財センターでは 2017 年～ 2018 年にも当遺跡の北半分の調査を行っており、今回はその続きの調査を 2023 年 10 月から行っています。

当遺跡は過去の調査成果から、旧石器時代～明治時代に至る複合遺跡であることが分かっています。特に、古墳時代後期～奈良・平安時代にかけては竪穴住居跡や掘立柱建物跡が複数検出されており、集落が営まれていたことが明らかになりました。また、江戸時代～明治時代にかけては、小日向台地の平坦部に龍興寺という臨済宗の寺院が所在したことが文献史料等から分かっており、調査でも龍興寺に関連すると思われる建物遺構等が検出され、実際に寺の存在を確認することができました。

今回の調査では、2024 年 1 月現在までに、弥生時代後期～明治時代までの遺構・遺物が検出されています。中でも特筆すべきことについて、以下にご紹介します。

調査区の中央付近から、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されました。方形周溝墓とは方形の墳丘（埋葬施設）の周囲に溝を巡らせた当時の墓のことです。墳丘部分は後世の掘り込み等により失われていましたが、溝は部分的に残存していました（写真１）。溝は復元すると、一辺約 9m、幅約 1m の規模を測ります。また溝の中には、溝内埋葬と考えられる一段深い掘り込みが確認され、溝内で何らかの埋葬行為が行われたことが推測されます。

調査区の北側からは、古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されました。一辺約 4m の隅丸方形で、カマドを有しています。カマドは粘土で構築され、両袖が残存し、東側の袖には長胴甕を構築材に転用しており、口縁部を下向きにして据えられていました（写真２）。カマドの中央にある甕は、元々はカマドの掛口に掛けられていたものが天井の崩落とともに燃焼部に落ち込んだものと思われ、当時の煮炊きの様子を窺うことができます。

調査区の南側からは、江戸時代の龍興寺に関連すると考えられる礎石が検出されました。礎石の中央の大石の平坦面に柱の形がくっきりと残り、周囲が黒く変色しています（写真３）。これは享保６（1721）年の火災で焼けた痕跡と思われ、礎石の検出位置から、門の一部である可能性も示唆されます。

今後の発掘調査や整理作業を通じて、各時代において当遺跡内ではどのように土地利用がなされていたのか、その解明に期待が持たれます。（島﨑　瑛美）

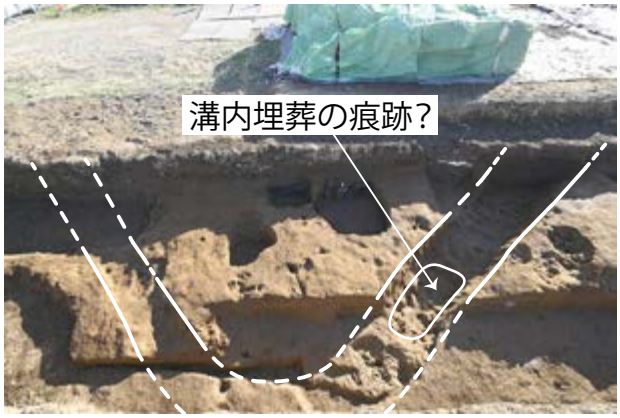


写真１　弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓

写真２　古墳時代後期の竪穴住居跡のカマド（南から）

写真３　江戸時代の礎石

あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.23

―　国際仏教学大学院大学　文京区春日二丁目西遺跡　―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。
このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。
もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

東京メトロ丸ノ内線茗荷谷（みょうがだに）駅を出て、春日通りを東へ進み、そこから南に曲がって少し進むと、丸ノ内線の線路があります。その先が今回ご紹介する春日二丁目西遺跡です。国際仏教学大学院大学建設工事に先立ち、当センターが平成 20（2008）年に発掘調査を実施しました。

発掘調査では、当時の谷を埋め立てて地形を大きく改変した結果、現在に近い地形が造られたことが明らかになりました。出土遺物の年代や絵図などから、谷の埋め立て造成は寛永 19～20（1642～1643）年までに行われたとみられます。

当時の地形を大きく改変するような造成を一体誰が行ったのでしょうか。考えられるのは、江戸幕府が主体となって行った可能性と、この地を拝領した越前丸岡藩本田家が行った可能性です。

江戸時代を通じて、この地は越前丸岡藩本田家をはじめ各藩の屋敷地として使用されました。幕末から明治時代にかけては信濃飯山藩本田家が所有し、明治 34（1901）年には徳川慶喜がこの地を取得します。その後、大正 2（1913）年に亡くなるまでの間、徳川慶喜はここで晩年を過ごしました。発掘調査でも徳川慶喜につながる痕跡が見つかっています。現在、国際仏教学大学院大学の門の脇には、「徳川慶喜公屋敷跡」の碑が建てられています。

遺跡周辺には坂や旧地名に関する説明板が各所にあります。それを参考にしながら、散策してみてはいかがでしょうか。　（小西　絵美）

◆調査成果が掲載された報告書
2009『文京区春日二丁目西遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 237 集　東京都埋蔵文化財センター
※写真１・２は上記報告書より引用

写真 1

写真 2

写真 1　写真左下が谷の中央部で、黄褐色土と黒色土の縞のように見えるのが谷を埋めた土。地表面と谷底との高低差はおよそ 6m
写真 2　調査地点南東隅で見つかった礎石は、出土位置から徳川慶喜邸にあった「御霊殿」の礎石だと考えられる。

写真 3

写真 4

写真 3　この場所は文京区指定史跡「徳川慶喜終焉の地」であり、国際仏教学大学院大学の敷地の北東には解説板が設置されている。
写真 4　写真左側が国際仏教学大学院大学、中央は今井坂（新坂）。坂の由来は江戸時代の地誌である『続江戸砂子』に記されている。

令和5年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー報告

旧石器から縄文へ

―気候激変期における人々の生活と社会―

「東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー」は、東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団による連携事業として、平成20年度から毎年開催しています。各財団が行った発掘調査や研究の成果を広く皆様にお伝えするとともに、財団の業務や役割についても理解を深めていただくことを目的に三法人が持ち回りで行っており、今年度は第16回目を迎えました。

今回は東京都埋蔵文化財センターの主催で、「旧石器から縄文へ―気候激変期における人々の生活と社会―」と題し、令和6年1月28日（日）に東京都品川区の荏原文化センターにて開催しました。

趣旨説明

東京都埋蔵文化財センターの山田和史が本セミナーの趣旨を以下のとおり説明しました。今からおよそ16,000～11,500年前の旧石器時代から縄文時代への移行期は、地球規模の気候激変期でもあり、数百年単位で激しく寒冷期と温暖期を繰り返しています。本セミナーでは、近年の研究の進展を踏まえて関東西部（東京・神奈川・埼玉）における「縄文化」の様相をとらえ、その画期と、人々が激しい気候の変化にどのように対応したのかを考えます。そこで、3つの基調報告で三都県の、記念講演で列島規模の様相をとらえ、ミニシンポジウムでそれらの比較を行います。

基調報告1

東京都埋蔵文化財センターの尾田識好が「武蔵野台地における旧石器から縄文への移行」という題で報告を行いました。まず、武蔵野台地の古植生のデータと、細石刃石器群や出現期土器に関する年代値の得られた遺跡を整理しました。そして約20,000～14,000年前の武蔵野台地を概観し、16,000～14,900年前頃に遺跡間で遺跡規模や石器の種類などの差が大きくなることから、居住行動の変化を想定しました。特にあきる野市前田耕地遺跡は、その膨大な石器の出土量から、複数回の居住を想像させる遺跡です。そこで、報告者らは改めて動物骨の再調査結果や遺物の分布状況を検討し、この遺跡が秋から冬にかけてサケ科魚類を漁獲する場として繰り返し利用されていたと考えました。これは定着的な生活の萌芽と捉えることができるため、この時期に縄文的な居住・生業のあり方への転換点があった可能性を指摘しました。

基調報告2

かながわ考古学財団の脇幸生氏が「気候変動期における神奈川の様相」という題で報告を行いました。ローム層が厚く堆積する神奈川県ならではの「相模野段階編年」のうち今回対象となるのは、旧石器時代の段階Ⅸ～Ⅹと、縄文時代草創期の段階Ⅺ～Ⅻです。段階ごとに出土石器・土器群・石器石材・共伴遺構・遺跡の分布を確認し、それらの変遷を検討しました。

その結果、段階Ⅺで石器石材が遠方の産地（信州・神津島）から在地石材（半径約70km圏内）へと変化すること、段階Ⅻには石器の器種のバリエーションが増加するとともに、隆起線文土器が一般的に見られるようになり、遺跡の分布が住居状遺構が検出された遺跡を中心にまとまることなどを確認しました。そして、こうした変遷を気候変化に伴って人々が活動を変化させていった結果と捉えました。

基調報告3

埼玉県埋蔵文化財調査事業団の水村雄功氏が「旧石器時代末から縄文時代草創期における埼玉県域の

様相」という題で報告を行いました。まず、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての埼玉県域の石器群の変遷をまとめました。その結果、約16,000年前以前には古利根川以西には信州の黒曜石原産地を遊動域に含めて生活を送る集団が、以東には関東－東北間の広い範囲を季節的に遊動する集団がいたと考えられるのに対し、それ以降は大宮台地周辺は関東地方の集団の狩場となり、資源獲得域は関東地方にほぼ限定され、遊動域が縮小していくと推定しました。そして、こうした変化は、長距離遊動をせずとも安定して資源獲得が可能だったことを示唆し、これが定住へ向けた兆しである可能性を指摘しました。

記念講演

記念講演には、東京大学准教授の森先一貴先生をお招きし、「縄文時代のはじまりを考える」という題でご講演いただきました。

まず時代区分について、「土器が出現すれば縄文時代」など、考古資料から検証可能な根拠を示せばいかなる区分も成り立つものの、それがどのような人間行動の変化を反映するのかという視点が必要であると説かれました。その上で土器出現期の考古資料の現状を整理され、縄文時代の始まり方・土器の出現と普及のあり方は地域ごとに異なった条件に基づいている可能性があることから、この時期の人間行動の変化を検討するにはまず各地域の遺跡から詳しく実態を解明するしかないと指摘されました。

そこで、いずれも縄文時代のはじまりを示す遺跡である前田耕地遺跡と九州南部の鬼ヶ野遺跡の様相を比較され、前者ではサケ科魚類というフロントロード資源（「獲得から貯蔵」の工程に労力のかかる資源）の集約利用を通じて季節的な定着的居住がなされた可能性があるのに対し、後者ではドングリなどのバックロード資源（「調理から消費」の工程に労力がかかる資源）の安定的利用によって定住度が高まった可能性を示されました。

このように関東と九州南部では地域個別のコンテクストに応じた特徴が見られますが、いずれにおいても約16,000年前の土器出現期に人間行動が大きく変化していることから、この時期を縄文時代のはじまりとみなしうると評価されました。

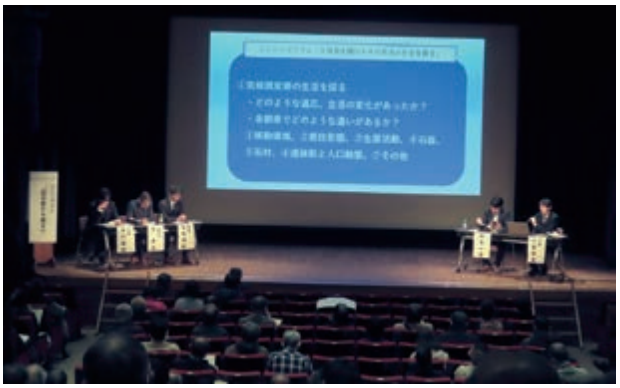
ミニシンポジウム

最後のミニシンポジウムでは、基調報告と記念講演の内容を受けて、石器の石材と器種組成から気候激変期の人々の移動・居住域を探り、「縄文化」の画期について討議を行いました。

まず石材については、東京・神奈川・埼玉県域のいずれにおいても、約16,000年前を境として在地の石材を主体とするようになることから、活動域が縮小していく様相を確認できました。器種組成については、狩場となる埼玉県域を除き、やはり約16,000年前を境にバリエーションが増え、機能分化する傾向が指摘されました。以上から、約16,000年前に大きな生活・社会の画期があったことが推定されますが、その理由が気候激変期への適応にあったのかどうかは、今後も資料の増加や研究の進展を待ち検討すべき課題であるとしました。

ご参加いただいた皆様のご協力を賜り、本セミナーは無事に閉幕しました。これからも埋蔵文化財と三法人の事業に対する理解を深めていただけるよう、連携を続けてまいります。　（宮本　由子）

森先一貴先生（東京大学准教授）



ミニシンポジウムの様子

令和６年度
企画展示紹介

多摩の“なんで!?”な出土品

“なんで!?”にしたのはなんで？

この展示は、遺跡の出土品にまつわる“なんで!?”という疑問をテーマにしています。普段の考古学の展示では調査や研究からわかってきたことを紹介するのが一般的なので、まだよくわかっていない出土品を目にする機会は多くはありません。ですがそうしたものも当時の暮らしの中で生まれた道具であり、必ず何かしらの意味があったはずです。この展示ではそうしたよくわからない出土品をあえて並べ、専門家でも思う６つの“なんで!?”を紹介します。

６つの“なんで!?”

まずはじめは、縄文時代を代表的する石鏃（せきぞく）、石匙（せっぴ）、打製石斧（だせいせきふ）、磨製石斧（ませいせきふ）と呼ばれる石器です。それぞれに大きすぎるものや小さすぎるものがあり、平均サイズから極端に離れています。本当に同じ種類なのか“なんで!?”な石器たちです。

次は、いわゆるミニチュア土器と呼ばれる小さな土器です。一般的な土器は、主に煮炊きをする鍋として利用されていたと考えられていますが、とてもそうは思えません。一方、その何十倍も大きな土器もありますが“なんで!?”なのでしょうか。

三つ目は土器の底が尖っていたり、丸まっている入れ物です。そのままでは倒れてしまいそうな形にしたのは、“なんで!?”なのでしょう。

表紙の土器の全体像

四つ目は、把手や注ぎ口のついた特殊な形の縄文土器たちです。見た目は現代のビールジョッキや土瓶にそっくりですが、どのような目的で“なんで!?”作られたのでしょうか。

五つ目は、有孔鍔付（ゆうこうつばつき）土器と呼ばれる「あな」のあいた土器です。この形の理由については様々な説が飛び交っていますが、未だに“なんで!?”な出土品の一つです。

最後は土器の文様や装飾にいきものを表現しているものです。何のいきものなのか、なぜそのいきものなのか、なぜ土器に表現するのか。いったい“なんで!?”なのでしょうか。

ぜひ皆様のご意見を！

この企画展示は、令和７年３月９日まで開催します。当センターに収蔵されている多摩ニュータウン遺跡の一風変わった出土品を知っていただくとともに、皆様もそれについて“なんで!?”と考えてみませんか？見たことのないものはもちろん一見知っているようなものでも、あらためて問いかける目で見つめると新たな“なんで!?”が見つかるかもしれません。

また展示の最後には、企画展示にちなんだアンケートを用意しています。展示をご覧いただき、皆様の思い思いのご意見をぜひお聞かせください。もしかすると皆様の投稿の中に“なんで!?”に迫るヒントがあるかもしれません。（塚田　清啓）

※今号の表紙：多摩ニュータウン No.46 遺跡出土の深鉢形土器

たまのよこやま 136　2024 年 3 月 31 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　https://www.tomaibun.jp/